

グリム童話における男性と結婚

柳 泉

1. はじめに

メルヒェンの様式 (Stil) を研究したマックス・リュティ (Max Lüthi 1909-1991) は次のように述べている。

Eigenschaften und Gefühle sprechen sich in Handlungen aus¹⁾

(メルヒェンの登場人物の) 性質や感情は話の筋の中で表現される。

Es stellt überhaupt keine Gefühlswelt dar. Es übersetzt sie in Handlung, rückt die Innenwelt auf die Ebene des äußeren Geschehens.²⁾

メルヒェンは、そもそも感情的世界を述べることがない。メルヒェンは感情的世界を話の筋の中に置き換え、内的世界を外来的出来事の平面へと押し上げているのである。

メルヒェンでは、登場人物の思考や感情は話の筋の中で、つまり登場人物の行動や振舞いを通して示される。このような一般的に認識されているメルヒェンの文体とは異なり、『子供と家庭の童話集』(Kinder- und Hausmärchen 1812) のいくつかのメルヒェンでは登場人物の内面が語られている。筆者は拙論「グリム童話における女性と結婚」³⁾において、結婚を前にした女性主人公の心理描写に注目して、彼女たちが結婚を受け入れた理由が好意と生活改善であると考察した。しかし、女性主人公の結婚相手である男性が結婚を決意するに至る理由に関してはまだ課題として残っている。

そのため本論文ではまず、結婚を前にした男性の心理描写に着目して、男性が結婚を決意するに至る理由を考察する。次に、それを女性主人公が

結婚を受け入れた理由と比較し、両者の相違について考察する。さらに、心理描写の文体についても比較と考察をする。

2. 対象とするメルヒェンについて

『子供と家庭の童話集』には200話のメルヒェン⁴⁾が収録されているが、「グリム童話における女性と結婚」では次の8話のメルヒェンを対象とした。⁵⁾

- ・「蛙の王様 または鉄のハインリヒ」
(Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich, KHM1)
- ・「ラプンツェル」(Rapunzel, KHM12)
- ・「森の中の3人の小人」(Die drei Männlein im Walde, KHM13)
- ・「つぐみの髭の王様」(Der König Drosselbart, KHM52)
- ・「白雪姫」(Schneewittchen, KHM53)
- ・「鉄のストーブ」(Der Eisenofen, KHM127)
- ・「白い花嫁と黒い花嫁」
(Die weiße und die schwarze Braut, KHM135)
- ・「本当の花嫁」(Die wahre Braut, KHM186)

上記8話のメルヒェンを対象とした条件は、次の4点である。

- ①主人公が女性であること
- ②主人公は話の冒頭で未婚であること
- ③主人公には結婚を約束した恋人や婚約者がいないこと
- ④結婚を前にした場面で女性主人公の心理描写があること

本稿では、女性主人公の結婚相手となる男性の心理描写を手がかりにするため、この4点に次の条件が加わることになる。

- ⑤結婚を前にした場面で女性主人公と結婚する男性の心理描写があること
- 上記8話のメルヒェンの中で、この5つの条件を満たすメルヒェンは「本当の花嫁」以外の7話である。

3. テキストと心理描写について

『子供と家庭の童話集』は初版第1巻が1812年に、初版第2巻が1815年に出版された。第2版(1819年)以降は1冊にまとまり、第7版(1857年)まで刊行されている。そのため7つの版が存在するが、本稿では最

終版である第7版のテキストが収録されている „Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Bd. 1, 2, 3.“ (1984) を使用する。引用の際は、巻数とページを付記する。

考察の対象となる場面は、基本的に、男性が女性主人公に求婚する前の場面とする。

心理描写の手がかりとしては、「グリム童話における女性と結婚」と同様に、Dornseiff (2004) による感情 (Fühlen, Affekte, Charaktereigenschaften) のグループ⁶⁾ および思考 (Das Denken) のグループ⁷⁾ に分類されている言葉と、Helbig/Buscha (1996) による発話導入動詞 (Redeeinleitende Verben) の思考・感情型動詞 (Verben des Denkens und Fühlens)⁸⁾ を参考にする。引用の際、手がかりとなるこれらの言葉が含まれている文章を下線で示し、拙訳を付記する。

4. 女性主人公と結婚する男性の結婚理由

本稿で対象としている7話のメルヒェンにおいて、女性主人公と結婚する男性の結婚理由として最も多い理由が「好意」で5話、続いて「歌声に感動」と「同情」であった。該当文を引用し、順に見ていく。

1) 好意 (5話)

引用1: Da ließ dieser das Bild vor sich bringen, und als er sah, daß es in allem seiner verstorbenen Frau glich, nur noch schöner war, so verliebte er sich sterblich hinein. (Bd. 3, S. 26)

そこで王は、その絵を持って来させた。王はその絵を見ると、亡くなった彼の妻にそっくりで、ほんの少しかけ妻よりも美しかったので、命もいらなくらい好きになってしまった。(「白い花嫁と黒い花嫁」)

妻を亡くした王が、家来に持って来させた絵を見た場面である。絵は御者のもので、絵には御者の妹でこの話の主人公が描かれている。王は美しい主人公を見て、好きになってしまう (sich verlieben)。そして王は主人公と結婚することを決めて、御者にドレスを持たせて主人公を迎えに行かせるのである。

引用2 :Da sprach er: »so schenkt mir ihn; denn ich kann nicht leben, ohne Schneewittchen zu sehen, ich will es ehren und hochachten wie mein Liebstes.«
..... Der Königssohn sagte voll Freude: »Du bist bei mir«,, und sprach: »Ich habe dich lieber als alles auf der Welt; komm mit mir in meines Vaters Schloß, du sollst meine Gemahlin werden.« (Bd. 1, S. 309f.)

そこで王子は、「では、この棺を僕に譲ってくれないか。僕は白雪姫を見ずに生きていくことはできないんだ。僕は白雪姫を一番大切なものを扱うように大切にして、敬うつもりだよ。」……王子は大喜びで、「君は僕のそばにいるんだよ。」と言った。……そして、「僕は世界中の何よりも君が好きなんだ。僕と一緒に父のお城へ行って、僕の妻になってほしい。」と話した。(「白雪姫」)

引用前半部で、王子は白雪姫の眠っている棺が欲しい理由と棺を譲り受けたらどのように扱うかを小人たちに伝えている。王子の意志が結婚式の誓いの言葉 (Eheversprechen) のように、助動詞 *wollen* と動詞「大切にする」(ehren), 「敬う」(hochachten) によって述べられている。

引用後半部は、白雪姫が生き返った場面からの引用である。王子は白雪姫に大喜びで (*voll Freude*) 話しかけ、白雪姫への好意 (*lieber haben*) を伝えている。形容詞 *lieber* が比較級であるが、比較対象が「世界中の何よりも」(*als alles auf der Welt*) であるので、意味としては最上級であると言える。

助動詞 *wollen* と形容詞 *lieb* は、王子の白雪姫に対する好意を表現している言葉である。どちらも小人たちあるいは白雪姫に向けた王子の発言内容の中にある。王子の意志や感情は、発話導入動詞 *sprechen* に導かれた直接話法の中で語られているのである。

引用3:Er sprach ihr freundlich zu: »fürchte dich nicht, ich und der Spielmann, der mit dir in dem elenden Häuschen gewohnt hat, sind eins: dir zuliebe habe ich mich so verstellt,« (Bd. 1. S. 300)

王は王女に優しく話しかけた。「怖がらなくてもいいんだよ、私と、みすほらしい家にお前と一緒に暮らしていたあの楽師は同じ人物で、お前のためを思っていたことなんだ……。」(「つぐみの髭の王様」)

この話の主人公は、高慢な王女である。王女の父親が、王女と結婚する意志のある男性（die heiratlustigen Männer）を城に招いた時に、王女はある王を見て「つぐみの髭の王様」と嘲笑する。娘の態度に腹を立てた父親は、娘を最初に城に来た物乞いと結婚させると決め、父の意向に従って王女は楽師（Spielmann）と結婚することになる。引用3は、その楽師の正体が「つぐみの髭の王様」であると明かされた場面からの引用である。王は王女に「お前のためを思って」（dir zuliebe）と、王女への愛情を伝えている。王女に対する王の愛情もまた、「白雪姫」同様、直接話法の中で語られている。

引用4: Da sprach's aus dem Einsenofen: »ich will dir wieder nach Haus verhelfen und will dich heiraten.« (Bd. 2, S. 315.)

Er wollte sie mit sich in sein Reich führen, (Bd. 2, S. 318.)

その時、鉄のストーブの中から声がした。「僕は君がまた家に帰れるよう手助けするつもりだし、……君と結婚しようと思っているんだ。」

王子は王女を彼の国へ連れて行くつもりだった。（「鉄のストーブ」）

この話の主人公は王女である。引用前半部では、鉄のストーブの中に閉じ込められた王子が、道に迷って困っている王女に、王女を助けようと思っていること、王女と結婚しようと思っていることを伝えている。助動詞 wollen によって表現された王子の意志は、「白雪姫」や「つぐみの髭の王様」同様、直接話法の中で述べられている。

引用後半部は、王女が王子を救出した場面からの引用である。助け出された王子は、王女を自分の国へ連れて行こうと思っている（wollen）。「白雪姫」において、王子が「一緒に父の城へ行って、僕の妻になってほしい」（引用2）と白雪姫に求婚したように、城や国へ行くことは結婚を意味しており、この引用後半部でも王女との結婚を望む王子の気持ちが語られている。

引用5: Der war nun nach ihres Vaters Willen ihr lieber Geselle und Gemahl. und morgen wollten sie zusammen in sein Reich gehen. (Bd. 1. S. 38f.)

今や、王女の父の意向で王子は王女の愛する男性であり夫であった。……そして明日、2人は一緒に王子の国へ行くつもりだった。（「蛙の王様 または鉄のハインリヒ」）

この話の主人公も王女である。王女が壁に投げつけた蛙が王子の姿に戻り、王女の父の意向で2人の結婚が決まる。引用文中の助動詞 *wollen* の主語 *sie* が王子と王女であることから、一緒に王子の国へ行くことは2人の意志である。王子の国へ行くということは、「白雪姫」や「鉄のストープ」と同様、結婚を意味しており、王子も王女もこの結婚を望んでいるのである。

2) 歌声 (1話)

引用6: Er ritt heim, doch Gesang hatte ihm so sehr das Herz gerührt, daß er jeden Tag hinaus in den Wald ging und zuhörte. (Bd. 1. S. 100)

..... doch der Königssohn fing an ganz freundlich mit ihr zu reden und erzählte ihr, daß von ihrem Gesang sein Herz so sehr sei bewegt worden, (Bd. 1. S. 101)

王子は馬に乗って帰ったが、王子はあの歌声にとても感動したので、毎日森へ行って聴いていたのだった。

……だが王子はラプンツェルに優しく話し始めた。そして、ラプンツェルの歌声にとても感動したとラプンツェルに語った。(「ラプンツェル」)

王子は森の中でラプンツェルの歌声を聞いて、その歌声に感動する (*ihm das Herz rühren*)。王子はラプンツェルに会いに行き、ラプンツェルに優しく (*freundlich*) 話しかけ、彼女の歌声に心を動かされた (*sein Herz bewegt worden sei*) ことを伝えている。王子のこの発言は、間接話法で述べられている。

3) 同情 (1話)

引用7: Da fühlte der König Mitleiden, und als er sah, wie es so gar schön war, sprach er: »Willst du mit mir fahren?« (Bd. 1, S. 107)

すると王は同情し、何とも美しい娘の姿を見て、「一緒に来るつもりはないか?」と話した。(「森の中の3人の小人」)

氷の張った川で糸をすすいでいた主人公に、通りがかった王が話しかける場面である。糸をすすいでいたことを聞いた王は、主人公に同情し (*Mitleiden fühlen*)、一緒に来ないかと主人公に尋ねる。「一緒に来る」と

いう表現は、「白雪姫」、「鉄のストーブ」、「蛙の王様」でも見られたように、結婚を意味している。王の主人公への同情心が、王が主人公との結婚を決めた理由である。

ここで、男性が結婚を決意する理由と女性主人公が結婚を受け入れる理由を比較し考察する。表1は両者の結婚理由をまとめたものである。タイトルの横に（父）と表記されているメルヒェンは、父の意向による結婚を示している。

表1 結婚理由

女性主人公	タイトル	結婚相手の男性
好意	蛙の王様（父）	好意
生活改善	ラプンツェル	歌声に感動
生活改善	森の中の3人の小人	同情
拒否（→反省）	つぐみの髭の王様（父）	好意
好意	白雪姫	好意
（拒否→）好意	鉄のストーブ	好意
生活改善	白い花嫁と黒い花嫁	好意

女性主人公が結婚を受け入れる理由で最も多いのは、「好意」と「生活改善」（各3話）であり、残りは「拒否」（1話）である。男性が結婚を決意する理由は、「好意」（5話）が最も多く、続いて「歌声に感動」（1話）と「同情」（1話）である。男性が、女性主人公に何らかの好感を持って結婚するのに対して、女性主人公は半数が生活を改善させるために結婚する。「生活改善」が理由で結婚するのは、継母に酷い扱いを受けている娘（「森の中の3人の小人」、「白い花嫁と黒い花嫁」）や塔に閉じ込められている女性（「ラプンツェル」）である。反対に、裕福な王女（「つぐみの髭の王様」、「鉄のストーブ」）は初めに結婚を「拒否」をすることもある。このことから、男性の結婚理由に「生活改善」がないのは、対象としているメルヒェンの男性が皆、王や王子であるからではないかと考えられる。女性主人公も結婚相手の男性も、共に「好意」から結婚するメルヒェンは、「白雪姫」と「鉄のストーブ」である。父の意向ではあるが、「蛙の王様」もまた、お互い「好

意」を持って結婚する。これら3話に共通しているのは、王女と王子の組み合わせということである。結婚を決意するに至る理由や結婚を受け入れる理由は、その人物の身分や境遇と関係していると考えられる。

5. 心理描写の文体的差異について

本章では、心理描写の叙述方法について考察する。女性主人公と結婚相手の男性、両者の心理描写を概観できるよう、表2にまとめた。

表2 心理描写の叙述方法

女性主人公	タイトル	結婚相手の男性
wollten	蛙の王様 (父)	wollten
dachte + 直接話法 sprach + 直接話法 (will)	ラブンツェル	ihm das Herz gerührt hatte erzählte + 間接話法 (sein Herz bewegt worden sei)
froh	森の中の3人の 小人	Mitleiden fühlte
erschrak	つぐみの髭の 王様 (父)	sprach + 直接話法 (zuliebe)
gut	白雪姫	sprach + 直接話法 (will) voll Freude sprach + 直接話法 (lieber)
erschrak dachte + 直接話法 gefiel	鉄のストーブ	sprach + 直接話法 (will) sprach + 直接話法 (will) wollte
sich freute	白い花嫁と 黒い花嫁	sich verliebte

感情を表す言葉による女性主人公の心理描写は、6種類 (wollen, froh, erschrecken, gut, gefallen, sich freuen), 8回確認された。このうち、erschreckenとwollenが2回ずつ使用されている。wollenについては、2回のうち1回が直接話法の中で用いられている。また、思考型動詞denkenによって女性主人公の思考内容が直接話法で2回述べられており、心理描写は合わせて10回である。

一方、結婚相手の男性の心理描写は感情を表す言葉のみであり、8種類

(wollen, das Herz rühren, Herz bewegen, Mitleiden fühlen, zuliebe, voll Freude, lieber haben, sich verlieben), 12回確認された。女性主人公と比較すると、言葉の種類は2つ多く、心理描写の回数は4回多い。言う型動詞 sprechenに導かれた直接話法の中で感情を表す言葉が使われているのは、12回のうち約半数の5回(助動詞 wollen が3回, lieber haben と zuliebe が1回ずつ)である。

直接話法は、発話者の言葉をそのまま伝える客観的な叙述方法である。メルヒェンの語り手、ここでは話の内容を読者に伝える語り手 (Erzähler) のことであるが、語り手は、結婚相手の男性の感情に関与していないのである。その一方で、女性主人公の内面は、語り手自身の言葉で読者に伝えている。心理描写の叙述方法に、女性主人公と結婚相手の男性でこのような差異が見られる要因があるのだろうか。このことについて、登場人物という視点から考えてみたい。リュティは「メルヒェンの主人公」(Märchenheld/in) について次のように述べている。

Held und Heldin sind die dominierten Zentralfiguren. Alle andern sind auf sie bezogen, ……⁹⁾

主人公は男性であれ女性であれ、支配的な中心的登場人物である。他の登場人物は全て主人公との関連の上で存在している。

Daß Interesse des Märchenerzählers und seines Hörers dem Ergehen des Märchenheld gilt, ……¹⁰⁾

メルヒェンの語り手と聴き手の関心が、主人公の身の上に向けられている。

語り手が主人公に近づき、主人公の心の中を覗き込み、語り手自身の言葉で主人公の内面を語るのは、主人公に対する関心の高さと関係がありそうである。女性主人公を取り巻く周辺人物の1人である結婚相手の男性の内面を、語り手は感情を表す様々な言葉を用いて語りながらも、語り手自身の言葉だけでは語らずに、言う型動詞の sprechenあるいは sagenに導かれた直接話法でも述べている。発言内容に含まれている結婚相手の男性の内面に介入しない語り手のこの態度は、男性には関心を持たず、距離を置いていることを示している。

6. 終わりに

対象とした7話のメルヒェンにおいて、男性が結婚を決意するに至る理由は「好意」が5話と最も多いことを確認した。同じ7話のメルヒェンにおいて、女性主人公が結婚を受け入れる理由は「好意」と「生活改善」がそれぞれ3話で最も多い理由であった。「生活改善」が理由で結婚する女性主人公は不幸な境遇にいる娘である。王女はもちろん王子の場合にも「生活改善」は結婚理由にはならない。このことから、結婚を受け入れる理由と結婚を決意する理由には登場人物の身分や境遇が関係していると考えられる。

感情を表す言葉の種類と心理描写の回数を比較してみると、女性主人公は6種類8回、男性は8種類12回であった。女性主人公に関しては、思考型動詞 *denken* による思考内容の叙述も2回確認されたので、合計10回の心理描写となる。男性の方が感情を表す言葉の種類も心理描写の回数も女性主人公より多いのである。叙述の仕方を見ると、男性の感情は12回のうち約半数の5回が直接話法で述べられている。つまり語り手は、男性の発言内容に介入せず、客観的に男性の内面を描写しているのである。語り手は、結婚相手の男性には関心を持たず、距離を置いてその内面を語っているのである。

最後に、心理描写が我々読者に与える効果について考えてみたい。内面描写による読者への影響について、Stanzel は次のように述べている。

Innenweltdarstellung ist ein äußerst wirksames Mittel zur Sympathiesteuerung, durch die Verteilung der Innensicht-Darstellung auf die einzelnen Charaktere und relative Häufigkeit bei einer bestimmten Figur kann sich eine deutliche Verlagerung der Lesersympathien zu der durch Innenweltdarstellung bevorzugten Figur ergeben.

内面世界の描写は、共感をコントロールするためのきわめて有効な手段である。……内面世界の描写を幾人かの作中人物に振り分けることによって、しかもその描写が特定の人物にかなり偏ることによって、読者の共感が特別に目をかけられたその人物に集中してしまうという事態が生まれる。¹¹⁾

心理描写の頻度が読者の共感と関心を呼び起こす大きな要因となるとす

れば、今回調査したメルヒェンでは、心理描写の回数が多い結婚相手の男性の方に我々読者は共感し関心を持つことになる。しかし、読者は女性主人公よりも相手男性の方に共感するのだろうか。読者の共感や関心は、心理描写の回数だけではなく、語られ方にも影響されるのではないか。メルヒェンの語り手は、女性主人公の心情を自分自身の言葉で述べ、結婚相手の男性の心情に関しては約半数が直接話法で客観的に述べていることを確認したが、内面描写の仕方は、語られる人物と語り手の距離を映し出している。メルヒェンの語り手は、女性主人公に近づいてその内面を描写している一方で、結婚相手の男性とは距離を置いてその心情を述べている。語り手と登場人物との距離感が、そのまま我々読者と登場人物の距離感になり、その結果、読者は距離感の近い女性主人公に共感し関心を持つことになるのではないだろうか。

このように、語られる人物によって心理描写の叙述方法に違いが見られたが、これが「グリムのメルヒェンのスタイルが獲得された」¹²⁾と言われる第2版からの文体であるのかどうかについても、今後、調査し考察したい。また、男性主人公と女性主人公の心理描写と比較して、男女の相違を考察することも課題として残されている。

注

- 1) Lüthi (1960), S. 15. 和訳の括弧内は筆者によるものである。
- 2) Lüthi (1960), S. 17.
- 3) 桜門ドイツ文学会『リユンコイス』第52号 2019年 25-35 ページ。
- 4) 『子供と家庭の童話集』には、151番が2つあるため厳密には201話であるが、『童話集』の最後に収録されているメルヒェンの番号が200番であるので、ここでは200話とする。
- 5) KHM とは Kinder- und Hausmärchen の省略であり、番号は第7版における収録順を示すものである。
- 6) Dornseiff, S.169-195.
- 7) Dornseiff, S.197-217.
- 8) Helbig/Buscha, S. 197.
- 9) Lüthi (1990), S. 151.

- 10) Lüthi (1990), S. 152.
- 11) Stanzel, S. 173f. (前田訳 124 ページ)
- 12) Rölleke, S. 525.

使用テキスト

第 7 版 : Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Bd. 1-3.
Frankfurt am Main 1984. (『完訳 グリム童話集』(一)～(五) 金田鬼一訳
岩波書店 1996 年 [第一巻], 1997 年 [第二巻], 1999 年 [第三巻], 1997 年
[第四巻], 1985 年 [第五巻])

参考文献

- Dornseiff, Franz: Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen. 8. Auflage. Berlin 2004.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joahim: Deutsche Grammatik. 17. Auflage. Leipzig 1996. (G.
ヘルビヒ/J. ブッシャ: 『現代ドイツ文法』在間進訳 三修社 1991 年)
- Lüthi, Max: Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen. 2. Auflage. Bern 1960.
- Lüthi, Max: Das Volksmärchen als Dichtung. Ästhetik und Antropologie. 2. Auflage.
Göttingen 1990.
- Rölleke, Heinz: Zur Biographie der Grimmschen Märchen. In: Kinder- und
Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819,
textkritisch revidiert und mit einer Biographie der Grimmschen Märchen versehen.
Hrsg. von Heinz Rölleke. 1. Auflage. Köln 1982.
- Stanzel, Franz K.: Theorie des Erzählens. 5. Auflage. Göttingen 1991. (F. シュタンツェ
ル: 『物語の構造』前田彰一訳 岩波書店 1989 年)